

戴帽式を終えて

准看護学科第 61 期生 佐野 沙也佳

戴帽の儀は、自分たちが看護師になるという決意を示すものです。そしてこれからも誰かのために尽くすという意思表示だと思います。

ナイチンゲールの灯火を先輩方から頂いた時、これでやっと看護師への道に踏み出せたことの喜びと同時に、医療を目指す者として「自分に何かできることはないか」と常に考え、実践していかなければならないという責任感が増しました。しかし、今の自分は、一人では何もできないことを強く感じました。そして、今より更に、勉学に励もうと誓いました。

私たち 61 期生は、親が看護師だから、職場で出会った看護師に憧れたからと入学の動機は様々で、年齢層も幅広いです。入学時からコロナ禍にあり、感染対策のため、行動制限があり、休憩時間や放課後に交流が図れず、会話をしたことがないクラスメイトもいました。戴帽式の練習が始まり、計画通りに練習を進めることができるのかという不安に駆られましたが、練習を重ねる度に意見交換をし、自然とコミュニケーションがとれクラスが和んできました。ナイチンゲール誓詞や誓いの言葉を個々で暗唱し、全員で合唱しました。試験に追われてか、覚えてない人や誰かが言うから自分は言わなくてよいと、他人任せの人が半分以上いました。なかなか意見はまとまらず、日々、葛藤がありました。練習がナースキャップや灯火の受け取り方などになると、自分の行動の在り方が全体の行動の出来具合に影響することがわかり、一人一人の自覚が芽生え、練習では、声の大きさや息継ぎの間が合ってきました。委員会を中心にコミュニケーションを図り、クラスの一人一人が周囲への思いやりや責任感が大切であることに気づきました。戴帽式を成功させるために同じ方向を向いて、共に頑張り、時にぶつかり合いながらも戴帽式を迎えることができました。そして戴帽式から、成功は自信に繋がり良いチームが出来上がることを学びました。

看護は一人ではできません。チームで助け合い、補っていくものだと思います。それには戴帽式で学んだ周囲への思いやりや責任感を生かし、患者様だけでなく、周りの人達にも常に笑顔で思いやりのある看護師を目指していきたいと思っています。